「女殺油地獄」下巻与兵衛の心理と意義

――主題の行方――

白方　勝

「女殺油地獄」下巻、お吉殺しに至る与兵衛の心理の解釈について、その間に与兵衛の心に悔悟があったとする坪内逍遙説（『近松之研究』）と非悔悟説の藤村作説（『上方文学と江戸文学』）があり、以後藤村説をとる論者が多かったのであるが、近時、井口洋氏が立聞きの趣向を論拠に逍遙説に帰り、新たな解釈を示された（『近松世話浄瑠璃の研究』）。これに対する反駁もあり、また井口氏の再反駁も出た。しかし、この問題は単に与兵衛の心理の解釈というにとどまらず、井口氏も主張されるように、そこに本作の主題があるとする見方となる。氏の説としては、次の「日本古典文学辞典」の解説が要を得ている。

〔前略〕その（改心の）結果、養父に迷惑の及ぶ借金をぜひとも返したいと考え、お吉に縋ろうとした。お吉にそれが通じなかったのは、もとより、日頃の行状と、明白に限界を持つ改心の質、加えてお吉への甘えがもたらした食違いである。それにしても、この不良青年のようやく到達した改心が、かえって殺人につながるという逆説がそこに成立する。与兵衛の行動を了解不可能な悪とする解釈は、近代の誤解に属する。〔（　）は筆者注。〕

お吉殺しに主題を置く見方は更に広末保氏の『近松序説』にまで遡ることができ、これがまた今日の通説のようになっているが、実はその妥当性こそが問題である。この見方に立てば、与兵衛の心理の解釈が、本作の主題の解釈をまで左右することになるが、しかし与兵衛の心理の解釈は、井口氏の提出された説にもかかわらず、必ずしも決着はついていないと言ってよい。そこで私なりの分析を提示して、主題のありかの方向を探ってみたい。

一

井口氏は、近松における立聞きの趣向を検討し、他の人物と同様与兵衛も立聞きによって改心したとする。立聞きには勿論、話をする人とそれを聞く人が必要であり、話される内容は聞く当人にとって意味ある、価値ある話でなければならない。つまり今後の劇展開に影響を与えるものでなければならない。立聞きによって変化するのは、その状況そのものであり、その状況下での人物の行為の変化である。立聞きの最も単純な趣向は元禄歌舞伎に、敵役の悪計を立聞きするという趣向で多く見られるが、主人

公たちはその状況の変化に応じて行動する。近松の世話物になると、心情の変化をも含んで現実的になり複雑になってくるが、その基本はやはり状況の変化である。井口氏の言われるように、立聞きにより人物の心情になんらかの変化が起こるのは当然のことで、それだけでは意味がない。立聞きして封印を切った忠兵衛と、殺人に及んだ与兵衛を同列に論じてよいはずはない。今まで自分の同情者であり理解者であると思っていた八右衛門が、立聞きによって、一挙に梅川との中を裂き、商売の信用を失墜させる敵対者に変化したのであるから、忠兵衛の行為はその方向に添ったものとなる。半七の場合もほぼ同様である。立聞きした与兵衛にもまた何らかの心の動揺変化がおこったのは否定できないであろうが、しかし、与兵衛の場合は、改心に向かうほどの状況の変化があったのであろうか。実は、徳兵衛・お沢の心情の立聞きによって、状況はどれほども変化してはいない。立聞きする与兵衛にわかったこととして、森山重雄氏は、親が勘当した真意と親が与えた金額を問題にされている（日本文学・三三七号）。

まず、勘当の問題では、勘当を許すとの親の真意を知ったこと自体が重要ではない。後でも与兵衛は、お吉に勘当が許されたら金を返すからと言っているだけで、そのこと自体には何の反応も示していない。勘当は、与兵衛にとって家を継ぐ権利を奪った最重要事ともいえるが、勘当が許さるからといって、以後はともかく現在の事態を何ら解決しないからである。与兵衛にとって重要なのは、勘当よりもまま父・実母の愛情の真意であろう。親どうし、またお吉に切々と訴える二人の愛情が心をうつものであることは、この一節ゆえにこの作品を評価する人の多いことでもわかる。その愛情を直接率直に聞いたのは、与兵衛には初めてであったかもしれない。徳兵衛は、与兵衛を差し置いて、妹のおかちに婿をとる話を進めてきたし、母も夫に遠慮してことさら与兵衛につらく当たってきたふしがある。それでも親のことである。四六時中いつもそのようではなかったであろうと考えるのが普通である。与兵衛自身意識していなくても、それを感じていたことは、中巻での家庭内暴力の時も、勘当されてのあわてぶりも、親に甘えていた点のあること見みればよいであろう。ただそういう親の態度によって愛情も率直に伝わることがなかったとは言えよう。その親の真の愛情を与兵衛は初めて立聞きによって知ったのである。これは大きな状況の変化であるとも言え、逍遙が言うように与兵衛は改心してよいはずであった。しかし、それは親の愛情をそれとして感受する心があってのことである。もし、与兵衛にそれを感受する心がなければ、それは状況の変化とはならない。その検討は後にするとして、ここでは疑問だけを提出しておこう。

次に親の持参した銭である。徳兵衛が三百、お沢が五百、計八百文である。これは勘当されている与兵衛が日用を足すほどのものでしかなく、与兵衛が抱えている借金には遙かに及ばない。与兵衛には、直接には小兵衛から借りた二百匁、後で明かになるが、茶屋にも多額の未払金がある。たとえ与兵衛が改心しようがしまいが、この状況には、つまり借金返済という事態には何の変化もない。

以下、お吉殺しに至る与兵衛の心理は、以上の二点を考慮しながら分析する必要がある。井口・森山氏のほか既に多くの解釈が示されているところであるが、私なりに敷衍してみたい。読みとそこから導かれる結論に違いがあるからである。便宜上井口氏が分析に用いた与兵衛のせりふa～fについて見る。

下巻に与兵衛が登場する時点で、与兵衛にとれる行為には三つの道があった。一は、そのまま放っておくこと、小兵衛の借金一貫目は親に支払わせることになる。二は、親に一切を白状して詫びを入れ、親に支って貰うこと。これはお吉に取り持って貰ってもよい。三は、無理をして

でもお吉から金を借りることである。一は最も簡単でよいようであるが、不当な金の貸し方をしている小兵衛の好むところではないし、そうさせないための釘はさしてある。男を立てる与兵衛の好むところでもない。そのつもりなら、初めからお吉の所へは足を運ばないであろう。二は、改心が前提となる。両親の愛情に期待することでもある。甘え放題に暴れていた与兵衛である、改心すれば親に泣きつくことはできたはずである。作者はその可能性を次に仕組んでいくが、この時点での与兵衛にこれを求めることは無理である。結局与兵衛は三の道をとらざるをえない状況にある。

下巻に登場した与兵衛は「一しやうさゝぬわきざしもこよひこじりのつまりの分別」をしていた。少し無理をしてでも金を借りるつもりでいる。「詞で与兵衛がくびしめるわたや小兵衛」が登場する前から、勘当されて全く支払いの当てがなくなり、茶屋の支払い等、事態はそこまで切羽詰まっていたのである。とすれば小兵衛は与兵衛を袋小路に追い込む役目にすぎないようであるが、ここで作者の巧妙な詐術が働く。親の名で借りたというこの金が、親の登場とともに与兵衛をも観客をも呪縛する。お吉殺しの後では、小兵衛の小の字も思い出さないほどに無視されているが（少なくとも支払ったという叙述はない）、これが与兵衛をつき動かしていき、また、お吉殺しの大きな要因であると観客も錯覚する。しかし、与兵衛におけるこの矛盾した行為は単に作者の筆の気まぐれとするより、やはり必然的な筆の運びとして注意しておいてよい。

ここで徳兵衛・お沢の登場となるが、作者がお吉殺しだけを意図したのであれば、与兵衛を真直に豊嶋屋に行かせてもよかったのであろうが、ここに与兵衛の立聞きを仕組んだのは、作者が二の改心の機会を与兵衛に与えるためである。その意味で与兵衛の改心がなるか否かは、この作品での大きな山場になる。

親が帰ると、与兵衛は「心一ツに打うなづき。わきざしぬいてふところに」して豊嶋屋のくぐり戸を開ける。「わきざし」は放棄されていない。これは下巻最初の与兵衛登場に応じており、状況は依然変化していないことを示している。「心一ツ」は説明されていないが、借金強要の覚悟であることは言うまでもない。その上「むねもくろゝもおとし付」となると、邪魔物の侵入を防ぐ用意をし、覚悟のほどを決めている。くろろを落とした与兵衛の行為に観客は不安を感じるであろう。お吉に向っての第一声が「定てかけも寄ましよ」とうら問うのは、与兵衛の心においては、親の愛情よりも、借金の方がはるかに重くのしかかっていることを示している。だから八百文を差し出されても、次のように、平然と言えるのである。親の愛情のこもった金とは見ていない。

aちつ共おとろかず。是が親達のかうりやくか。

与兵衛は立聞きでその金額も知っている。それを初めて知って驚いたような言い方をしているのは、いかにも空々しい。親たちの差し出した金など初めから相手にならないと決め込んでいる態度である。

bさきにから門口にかにくはれ。なが〳〵しい親達のしうたん聞て。涙をこぼしました。

問題となっている右のせりふも、改心の情のこもゐたものではない。「愁嘆」は、芝居用語で、徳兵衛・お沢の口説がまさに愁嘆場であったことを与兵衛に言わしめている。劇中劇と見てもよい。与兵衛は、蚊に食われながら、この愁嘆場を見物していたのである。しかも「なが〳〵しい」にはこの愁嘆場が早く終ればよい、つまり早く親が帰ればよいとの気持ちが窺える。愁嘆への共感すら否定し、我慢しながら他人事のように立ち聞きしていたのである。従って「涙をこぼしました」というのも、愁嘆事を見た時の決り文句を用いたまでであって、真実心はこもっていない。与兵衛は実は涙などはこぼしていないと見るべきであろう。

お吉の方が「他人でさへめを泣はらした」と言っている。口先だけの与兵衛と対照的である。本心は悔い改めているが、今までのひねくれた性格は急に改められるはずはなく、かく空々しい言葉になったという解釈もあるいは可能であろうが、今までの与兵衛の言動からはそれは察することができない。

c いかにも〳〵よふがてんしました。たゝ今よりま人間に成てかう〳〵つくすがつてんなれ共。かんじんのおじひの銭がたらぬ。（以下略）

お吉に説諭されて、それを受けた言葉としては、軽いであろう。合点したと二度繰り返しているのもお吉に迎合してひとまず納得させるためではないかと思わせる。将来真人間になると言っているが、過去への反省がない。将来の約束をしてその場を切り抜けようとするのは、よく使う手である。「おじひの銭」にしても、立聞きした徳兵衛の言葉の「子は親のじひで立」とあったのを受けているとすれば、この慈悲は子を立てようとする銭の意であるという皮肉な解釈もでき、親の愛情を感じての慈悲ではないことになる。与兵衛がこの場を切り抜ける方策はお吉から金を借りることだけであって、悔い改めて親に詫びを入れたりすることではなかった。徳兵衛の勘当を許そうという言葉は聞いているはずであるのに、積極的にそういう方向には話を進めないで、単に「かん当のゆりる迄かして下され」と自然な成り行きでそうなるかのような口ぶりである。詫びる心がないからである。お吉が「どこに心がなをつた」と言うのは、直感的にそれを感じとっての言葉である。与兵衛とお吉との「食違い」を言うなら、徳兵衛・お沢の口説に親としての愛情を感じたか否かにある。

d ふぎに成ツてかして下され。

e くどふいままいかして下され。

ここで与兵衛は、是が非でも金を借りることに固執している。dではお吉が「世間のぎりをかいても。かねかつて」云々と言っていたのに対して、不義の汚名をきても金を借りたいと言っている。お吉の義理が世間常識の上に立った道理、モラルであるのに対し、与兵衛はこれを男女の間の不義に言い換えている。そこにお吉に対する特殊な感情の揺らぎをみようと思えば見ることもできる。上巻で、若い女が若い男のべべ解いて疑われた、あの隠微な関係が突如現実に蘇ったと見てもよい。両親の愁嘆を他人事のように聞いた与兵衛が、お吉には他人の壁を越えようとしている。「ふぎに成ツても」という言い方には、それを迫る恐ろしさが感じられる。これがお吉への脅威になったことは否めない。お吉はより身構えることになる。脅迫に近い言い方はそのまま与兵衛の本心が金を借りることにあったことを示している。eで「かして下され」と繰り返しているのも、それを証しよう。しかし、お吉の義理からすればこれほど非常識な言い方はない。しかも拒絶されると、一転して次の与兵衛のいかにも改心したかのような長せりふとなる。d eを与兵衛の本心としたら、改心の見えるf gとは符合しない。そんなに簡単に人の心は改心へと反転するものであろうか。

f ハテ与兵衛も男。二人の親の詞がしんこんにしみこんでかなしいもの。（云々）

g たゝ今両親のなげき御ふびんがりを聞ては。しんで此かね親仁のなんぎにかくること。ふかうのぬり上

与兵衛としては、言いにくい借金の内幕を語り、作者も「めの色も誠らしく。（お吉も）そうした事もと」と思わせている。ただ問題はこの与兵衛の「誠」が奈辺にあるかということである。親のことばが心根にしみこんだのか、借金に追い詰められた状態の打開にあったのか、ということである。

右のｆｇを素直に読めば、与兵衛の心にも親の愛情は染み込んでいたということになろう。井口氏の言われるように、立聞きを通して「親の立場への配慮」へと変質し、「徐々に真剣さを帯びて」きたということになる。私も特にそれを否定しようとは思わない。人の心は単純ではない。始めは芝居を見るように、むしろ他人事のように思っていた親心が、追い詰められていく過程で、真実に思われてくることだってある。立聞きしたのであるから、何らかの変化があってよいとしたのはそこである。潜在的に与兵衛の心底にかくれていた思いがようやく現れ出たとみてもよい。しかし、それは与兵衛の心の一部であって、その全体を覆うものではない。

まず、ｆであるが、この言葉は当然のことながらｂの「なが〳〵しい親達のしうたん」云々のせりふと相応ずる。ｂが先に見たように与兵衛の真実心のこもっていないものとしたら、ｆは突然に逆転した心情の吐露ということになる。仮にｂがｆのいびつな言い方であったとしても、それ以後お吉の不信感をつのらせてきた経過に即応しない。この時点においての与兵衛の突然の変化には、やはり全面的な信頼感を置くことはできない。そう解すれば、「ハテ与兵衛も男」にも体面だけにこだわった、中身を伴わない空々しさが感じられよう。

ｇについてはその前提となっている「じがいして死ふとかくごし。」云々が問題となる。脇差を持って最初に登場の時の心積りは少なくとも自害ではなかったはずである。自害の積りなら、脇差さしてお吉の所へなど来るはずがない。とすれば、このせりふは嘘となる。与兵衛とて人のこと、借金に追い詰められての果てにそう思ったことがあったかもしれないし、あって当然でもあるが、それは心に浮かんだ一瞬の泡のようなもので、本心とすることはできないし、ここでは問題にならない。また、「ふかうのぬり上身上のはめつ」とあるのも、正確な言い方ではない。自分の自害が前提であるから、「身上のはめつ」は与兵衛の借金を支払うがための親の身代の破滅ということになるが、いかに小商人とはいえ、極端に過ぎた言葉であろう。与兵衛も「かん当のゆりる迄かして下され」と言っているのは、親には支払う能力のあることを認めているわけで、「身上のはめつ」とは矛盾する。そこに言い訳がある。とすればｆのせりふは、与兵衛の真実心がこもっていたとしても、かなり割り引かれなければならない。不孝の「ぬり上」は成り立たない。自害して死のうとは言っても、自害して詫びようとは言っていない。

この長いせりふを見る限り、与兵衛を「無知」（藤村作氏）「精神薄弱」（横山正氏）ということはできない。自分の置かれた、「死るにもしなれず。いきてはいられず」という状況を論理的に弁じているからである。そしてその結論を「どふぞかして下され」にもっていく狡さも感じられる。そのことに注がれている与兵衛の知恵は劣ったものではない。立聞きをして、親の愛情に心の動揺があったとしても、それは金を借りるための泣きつきの手段に応用されており、結果的にはそこで止まるものである。立聞きした後では、改心して詫びるなら別の方法も可能であるが、与兵衛はそれには一切触れようとしない。与兵衛の言動が金を借りることで一貫していると言われてもいたしかたあるまい。もし与兵衛に「めの色も誠らしく」見えたとすれば、それは金を借りることへの真剣さである。

与兵衛の心理を以上のように解するならば、立聞きによりその心情に何らかの変化はあったかもしれないが、それは与兵衛の行為に決定的な要因となるものではないことがわかる。心情の揺れの多少にかかわらず、与兵衛の金を借りるという基本的な行為は貫かれており、それは改心のために金を必要としたものではなかった。お吉を刺して後も「こなたの娘がかはひ程。おれもおれをかはひがる親仁がいとしい。」と言ってい

るのもなお真実心のこもったものと見ることができるであろうか。「かねはらふて男たてねばならぬ。」が本心ではないのか。なぜ金を必要としたかと言えば、藤村氏の言われるように、親に払わせてもよいのではあるが、それでは以後の自分が立たなくなるのであり、また小兵衛以外の借金も多いのである。追い詰められた状況下では常識が通用しない。その常識さえも持ち合せているかどうか分からない与兵衛には、借金と人の命の計量などはできなかったのである。それほどの判断のつかないところに、犯罪者一般の愚かな心理があるとも言える。そういうことから言えば、それは与兵衛自身の愚かさではないであろう。現今のテレビドラマを見ても、いかに愚かな行為にみちていることか。そうしなければ成り立たない安易なドラマでもあるが、一方犯罪者の普遍的な心理でもあろう。

与兵衛の心理を長々とたどってきたが、それは与兵衛が改心したか否に意義があるのではない。そのことがこの作品の構造・主題の解釈にまで影響するからである。与兵衛が改心しなかったとすれば、それはどうしてかを考えておく必要がある。その理由を与兵衛の「無知・野生」といった性格にだけ求めるのではなくて、愁嘆場を演じた親たちの側も検討してみなければならない。

二

次に親の愛情が与兵衛に与えた影響について考えてみよう。先にも述べた通り、与兵衛は立聞きをして初めて現実に接する親の態度からは汲み取れない愛情を知ったことになる。まずその愛情の質を考えてみると、そこで問題となるのが、やはり義理である。徳兵衛のせりふについてみよう。

Aうみの母の追出すを。ままて、の我らけいはくらしうとめられず。

Bこちの女房おさはが一家一門皆侍。（中略）義理かたひうまれ付。

C本親の旦那もぎやうぎつよく。ぎりもなさけもしつたる人。ふたりの子共に心をつくすは皆だんなへのほうこう。

Aはあくまで継父の立場を守った態度であり、ここで、実は勘当は本意ではなかったと言っても、それは与兵衛にそのまま通ずるであろうか。実子ではなくても、それなりに育ててきた愛情があるであろうし、篤実な徳兵衛だけに与兵衛に対する思いは人一倍であろうが、それを率直に流露せしめていないのが主従の義理を背負った継父の立場である。その心の隔てが与兵衛の心にも一線を画さしめていたのである。徳兵衛の愛情はえてして自己満足に終ってしまいかねないものであった。

Bにおける義理は、「一家皆侍」とあるように、儒教的な人としての道義と解してもよい。Cの義理は町人の交際を含めているであろうが、やはり一般的な道義性を言う言葉である点はBと同じである。従ってこのことは、徳兵衛もまた義理堅い男でなければならないという論理を導く。しかも徳兵衛がいかに義理を意識していたかは、一般的には「なさけと義理」と言うところを、ここのみ逆に言っているのでもわかるが、それほどに義理堅い徳兵衛は義理を我身に引き付け過ぎて「奉公」の義理に変えてしまう。子への愛情は親方への奉公に転化する。それはいかに徳兵衛の心の真実であっても、与兵衛に通ずるものではない。逍遙が徳兵衛を、親ではない、家僕であると言っている通りである。その点、中巻で見た徳兵衛と何の変化もない。与兵衛はそういう義理に覆われた継父の態度ばかりに接してきたのである。そこに、周囲の正義の中で一度その枠を離れた与兵衛の「受難被虐の弱者」（松井静夫氏「不可視の座の荷い手たち」論集近世文学1）を見ることも可能である。その与兵衛にとって、態度の裏にある継父としての愛情を知らされたからと言って、どうなるものではない。それで今までの長い年月が償われるもので

もない。結局与兵衛にとって、徳兵衛は依然として元のままの徳兵衛であり、徳兵衛の口説は、結局愁嘆事でしかなかったであろう。

Dしゆりはんどくのあほうでもあじやせたいしの鬼子でも。母の身でなんのにくからふ。

Eふびんさかはいさはて、おやの一ばいなれ共。母がかはいひ、顔してはへだてた心に。云々。

F母がいききもをせんじてのませといふるしやあらば。身を八ツさきもいとはね共。

右の三に分けてみたが、このうちDFは実母の悲痛なまでの愛情が吐露されており、心うたれるものがある。しかし、Eとなると、やはり問題である。継父に遠慮してわざと与兵衛に辛く当ったとなると、与兵衛の立場がなくなる。継父にかわいがってもらいたさに、母が辛く当る。万事が万事このようではなかったにしても、与兵衛からすれば、邪慳なまでの母を見てきたことになる。父は遠慮し、母が邪慳であれば、与兵衛はどうなるか。今ここで、今までのことは嘘であった、本心はかわいいのだと言われても、与兵衛は信用できるのであろうか。そのために与兵衛にとっては我が身の浮沈にかかわる勘当を受けたのである。お沢は、徳兵衛が使用人であったからなおのこと気を使っているのであろうが、いわばこれは夫への義理、夫婦の義理であると言ってもよい。逍遙が言うように、「手島屋にての慈母と義父との問答は人情の極致、一篇の精髄浄瑠璃の圧巻、其子ならぬものもこれをきかば Turn hisc olor and has tearing eyes」云々となるほどであるが、いみじくもそれは「其子ならぬもの」の場合であって、与兵衛の場合ではないであろう。勿論与兵衛とて少しも心を動かされなかったのではない。DFでは動かされたから、お吉との問答のなかで一応は、それを口にしてもいたのである。殺人に及んだ後もなお次のように言っている。

Gこなたの娘がかはひ程。おれもおれをかはひがる親仁がいとしい。かねはらふて男たてねばならぬ。

お吉の言葉に対して反射的に出てきた言葉で、いくらか割り引く必要はあるが、こういう言葉を口に出すからには、ともかくも与兵衛には、親仁の愛情はわかってはいるものと言うことになる。しかし、このせりふもまたその通り素直には聞けない点がある。まず、継父と実母の愛情を計量するのもいかがとは思うが、同じ義理に囚われた愛情とは言いながら、お沢の方がはるかに深い愛情が現れているのは自然であるし、与兵衛にとって、その真意が分かり、改心させる可能性を持つのはむしろこの実母の方ではなかったか。それにもかかわらず、徳兵衛のみをGでは特に持ち出しているのが不審である。それは、徳兵衛の愛情が義理に囚われたそれであったように、与兵衛の理解もそれであったと解する外はない。徳兵衛は義理の親であるから、これを立てようとするのであろうか。そうであるから、金払うて男を立てねばならないのである。本来なら、少々の歪みはあっても、実の母の愛情溢れる言葉にこそ感ずるはずなのに、お沢は全く無視されている。徳兵衛との義理関係が強く与兵衛を縛っている。義理は金を払うことと結びついて、まことに奇妙な関係で与兵衛の殺人につながっている。仮に与兵衛がまともにそう思ったとしたら、義理はいっそう始末の悪いものでしかない。

与兵衛は、親の愛情は理解したとしても、それは表面的な理解に止まり、改心するまでには至らなかったとみるのが妥当である。近松は、与兵衛が改心して親に迷惑をかけまいとする余り、それを信じないお吉との間に食い違いを生じて殺人に至るという過程としては描いていない。親の愛情も与兵衛を変えることはできず、殺人は終始借金返済の目的という線を貫いている。義理に囚われた愛情には与兵衛を改心させる力はなかったばかりか、与兵衛をして逆に殺人にまで導くものであったと言

わざるをえない。

以上、与兵衛の心理の経緯を地道にたどっていけば、殺人の動機を小兵衛の借金に限定したこと、与兵衛の行為を「本能的性格」と捉えることを除いては、基本的に藤村作説を否定する根拠は何もない。したがって、与兵衛に改心が見られなかったとすれば、与兵衛の改心を理解しえなかったお吉との間に生じた食い違いに主題があるとする説は成立しないことになる。

三

お吉殺しを下巻のクライマックスとすれば、後は与兵衛逮捕だけである。観客の興味を掻き立てるほどの問題ではないのに、新町の夜店の賑わい、森右衛門の探索と筆を費やし、一月余りも与兵衛を泳がしすぎている。改心どころか、以前にも増しての放蕩ぶりがあらわである。その間、一度も親のことも、小兵衛のことも思い出していない。そのあげくの逮捕である。したがってこの時のせりふも問題がある。

H一夜過れば親のなんぎ。不孝のとが勿体なしと思ふ計に眼付。人を殺せば人の嘆。人の難義といふことにふつゝと眼つかざりし。

こりせりふは、与兵衛が逮捕され、初めて人間らしい悔悟をしたものとされているが、はたしてそうであろうか。与兵衛のせりふをたどると、「一生不孝放埒の我」と認めながら、「一紙半銭ぬすみいふことついにせず」とごく当り前のことで正当性を主張するかと思えば、茶屋傾城屋の払いは遅れても気にならないと横着さをさらけ出し、さらに一転して親を思いやっているかのようなHのせりふとなる。支離滅裂、どこに与兵衛の本意があるのかと思わせるが、この中にも近松はそれなりの論理は伏せてある。これを整理すると、不孝の数々、不義理は重ねて来たものの、盗みと言った殊に人に迷惑を及ぼす悪事はしていないと思っていたが、実はそれも人に迷惑をかけることになるということに気がつかなかった、ということになる。しかし、それをHのせりふにまで拡大するのは、余りにも得て勝手な論理と言わざるをえない。そういう身勝手な理屈が口に出まかせにしゃべられているのであって、与兵衛の心が動転している時とはいえ、作者から言えば本気で与兵衛に悔悟させているとは思われない。

作者は、ここで、一見悔悟させているように見せて、実は殺人に至る心理を説明しているにすぎない。近松はここで分かりにくかった与兵衛の殺人の心理を観客に説き明かしているのである。ただ、この説明も今まで近松が描いてきた与兵衛の心理と一致するものでないことも明白である。今まで与兵衛のお吉殺しへの行為を支配していたものは、借金返済のために金を借りることであった。親のことも言ってはいたが、それは主要因ではなかった。それがここでは唯一の要因として与兵衛の口に上っている。これは、与兵衛からすれば口先だけの自己弁護であり、結末においての作者の取り繕いである。

そこで、お吉殺しの後の与兵衛の足取りをたどると、森右衛門の調べでは、まずその足で行きつけの茶屋の桜井屋源兵衛に三両余、花屋にも三両余を払っている。盗んだ金額からすれば、まだ綿屋小兵衛に支払う二百匁は残っているはずであるが、払った形跡がない。少なくとも近松は小兵衛のことを、さらに言えば親のことも無視している。親の難儀、親の御不憫がりを思うのであれば、真っ先にこの借金を支払うはずである。殺人という思わぬ入手方法であったから、そこから尾が出るのを心配したというのであれば、茶屋の払いも同じことである。小兵衛への借金返済が与兵衛の行動原理であるかのように思ってきたが、実はそうではなかった。親への思いやりも小兵衛の借金も、与兵衛の意識には作用したであろうが、それは殺人にまで与兵衛を駆り立てた決定的要因では

なかったと言える。現実においては、殺人を決定づける心理はそう単純でないであろう。与兵衛の場合も、案外意識の底にあったのは、茶屋の払いを済ましていい男ぶりを見せて、いい恰好をして遊びたいという欲求もあったかも知れないのである。さらには直接殺しの手をくだす心理は、理性を放棄した狂気にも似た妄念の仕業であろうから、それだけにそれを単純化して説明できるのは、行為の後のことであって、殺しの過程ではない。作者が一応はHのように説明してみせたのも、その心理の一つのケースにすぎない。与兵衛のせりふに悔悟の要素が認められるとすれば、それは浄瑠璃の持つ道義的教戒的意義を考えれば、対観客用であり、特に与兵衛の心理や性格との必然性を考える必要はない。一方で極悪人ではないとの印象を観客に与えようとしているにすぎない。

与兵衛のせりふが殺しの心理の一つの説明であるとすれば、以上筆者が辿ってきたところも一つの解釈である。改心説が成立するならば、それも一つの解釈である。実際のところ、上演した場合も、与兵衛の詳密な心理を観客が見て取れるであろうか。たとえ太夫が与兵衛の心理を分析し、語りに生かし、人形もその情をこめて演出したとしても、そこまで分析的に観客が理解できるということではない。観客には与兵衛がお吉を殺す過程が納得できればよいとしなければならないであろう。（この「読み方」については諏訪春雄氏『近松世話浄瑠璃の研究』に譲る）つまり作者は、殺しに至る与兵衛の心理は初めから合理的論理的に分析して描写してはいないのである。近松は与兵衛の殺人への心理自体を目的にして叙述してはいない。近松からすれば、その場その場の与兵衛の真実な情を込めようとしたに止まるであろう。近代作家の心理描写におけるような分析的論理的合理的な心理解剖は意図していないし、またそれの可能な時代ではなかった。しかし、表現は作者の思念を越える。情を込めることは、与兵衛の内面に迫ることとなる。それは「立聞き」といった趣向で説明できる単純な心理ではない。要は、殺しに至る心理は、表現の分析によって生まれた解釈の問題である。殺しの心理自体に意義があるのではなくて、与兵衛という人間にかかわる心理であるから問題になる。ここであえてそれにこだわったのも、やはり与兵衛の人間を考える上で重要な解明の鍵があると見たからである。その鍵を要約すれば、義理に囚われた親の愛情は与兵衛の心を変ええなかったこと、その義理が微妙に与兵衛の殺しの心理に絡んでいることの二点である。

近松はあるいは明確な意識のもとに与兵衛を造型したのではなかったのかも知れないが、特異な個性的とも言える人間像となっていることも否定できないであろう（拙稿・文学語学二六号参照）。それ故に合理的な解釈を許す叙述はしてある。その心理描写から与兵衛が担った主題が見えて来る。悔悟説を否定すれば、当然のことながら不条理なお吉殺しに至った与兵衛の悪とその根源の追究が主題となる。それは「了解不可能な悪」という複雑なものではなく、単純なことに属する。つまり、徳兵衛・お沢の慈悲心でさえ与兵衛を悔悟させることができず、結果的に殺人にまで至った根源は何かということを見ればよい。そして、そう解するためには与兵衛の性格を本能的とすることはできない。本能的とすれば、与兵衛の悪はすべてそれに帰せられてしまう。与兵衛の悪を生んだものは何かを近松は意識的に追究しているのではたいか。森山氏は、与兵衛の悪の背景として、廓と金融をあげる。確かにそれは「背景」としては認めてよいであろう。しかしそれをもって主題とすることはできない。やはり中巻から下巻に至るこの作品のもっている「家」の重み、主従の義理に主題を移さねばならないと考える。それは近松が世話物において追究してきた課題の結論であり、それに加えて、晩年、時代物において関心を深めてきた悪の問題をも追究しようとしたのである。

（一九九一年一〇月一一日受理）